

國學院大學学術情報リポジトリ

Anadorare-Moshiageru

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2023-02-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大久保, 一男 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000910

「あなづられ奉る」

大久保 一 男

〔一〕今泉忠義先生は、『源氏物語現代語訳』の「はしがき」で、

例へば、「あなづられ奉る」を「馬鹿におせられ申し上げる」とでもしてみたら、それが現代語かといはれるだらうが、これは、現代語にうつしたなら、こんなにもなるだらうといふところを見せたに過ぎない。こんな現代語訳があつてもいいのではないだらうか。

と書いておられる。これは、先生が「迷惑の受身」とお呼びになった（今泉忠義『国語学概論 昭和二五年』、その「迷惑の受身」に客体敬語が下接すること、すなわち、迷惑行為の行為者に対して客体敬語を用いることが、現代語においてはおこなわれないことに基づく断り書きであると察せられる。

〔二〕じつは、『源氏物語』に「あなづられ奉る」の用例は見当たらない。「はしがき」は、分かり易い「例へば」なのである。しかし源氏物語には、迷惑の受身に客体敬語が下接した例が、もちろん存在する。数例を引く。

（源氏↓空蟬）「…、さるべきにや、げにかくあはめられ奉るもことわりなる心惑ひを、みづからも怪しきまでなむ」（帚木、七〇頁10行目）

（源氏、心中）「…、我が心のあまりけしからぬすさびに、（葵上カラ）かく恨みられ奉るぞかし」と思し知らる。（紅葉賀、二四五頁）

この（頭）中将は、「源氏三」さらにおし消たれ聞こえ給じ」と、はかなきことにつけても、思ひ挑み聞こえ給

ふ。(紅葉賀、二六一—10)

(源氏↓紫上、文)「…、我ながら心よりほかなるなほざりごとにて、(アナタカラ)疎まれ奉りし節々を思ひ出づるさへ胸痛きに、…」(明石、四六六—10)

受身に客体敬語が下接した例は、受身が「迷惑」の場合に限らない。いわば「恩恵」の場合の例もある。

(玉鬘ノ乳母ノ息子↓身内ノ者)「…。(玉鬘ハ)よき人の御筋といふとも、親に数まへられ奉らず、世に知られどは、何の甲斐かはあらむ。…」(玉鬘、七二四—6)

(柏木↓義母御息所)「…。(私ガ)数ならぬ身にて、及びがたき御中らひになまじひに許され奉りてさぶらふしるしには、長く世に侍りて、…」(若葉下、二二一九—3)

(薫大將ガ)御簪にて(今上帝カラ)もてはやされ奉り給へる御おぼえ、おろかならずめづらしきに、(宿木、一七七—11)

(三) 十歳から八十歳に至るまで宮中に仕え、その間大正・

昭和両天皇の東宮侍従をも務めた甘露寺受長氏(一八八〇—一九七七)の著で、昭和天皇について綴った『天皇さま』

には、そもそも受身表現が少ないのだが、受身に客体敬語の下接した例が見当たらない。

もう一度、陛下に大笑いされたことがある。(一八四—8)これは、筆者(≡甘露寺氏)の認識はともかく、客観的には迷惑の受身の類であろう。

お役ご免になってからも、(私ハ)ずっと毎年天長節の御宴には宮中に召されていた。(六九—1)

これは明らかに恩恵の受身であるが、行為自体が主体敬語で表されていて、仮に客体敬語を下接させると敬語の重複使用になる。しかし、

私が東宮侍従として、おそばに仕えたとき、最初に命ぜられた仕事^レが、貝類の図を描くことだった。(八五—16)摂政宮殿下(≡東宮)から、市中の視察を命ぜられ、西園寺と主馬寮の技手と、三人で出かけた。(二九四—9)(陛下ノ前デ)固くなっていた人も、つい引き入れられて、スラスラとお話しもうしあげるようになるのである。(二七九—9)

これらは、筆者の認識としては決して迷惑の受身ではなく、むしろ恩恵の受身とも察せられるが、いずれにしても、受

身に客体敬語が下接してないのである。

現代語においては、受身に客体敬語の下接することがない。すなわち、迷惑行為・授恵行為の行為者に対して、「…(ラレ)申シアゲル」という客体敬語によって敬意を表すことがない。したがって、行為者に対して敬意を表そうとする意識が働くときには、受身表現をとることを避けて、迷惑行為・授恵行為の行為者を動作の主体とする主体敬語「オ…ニナル」「オ…クダサル」「…テクダサル」によって、または、迷惑行為・授恵行為の行為者を行為の客体とする客体敬語「オ…イタダク」「…テイタダク」によって、敬意を表すのである。

では、迷惑・恩恵両様の、受身に客体敬語が下接する表現は、源氏物語の後、いつたいいつ頃まで行われたのか。具さな調査には程遠いが、現時点でのささやかなメモを書き留めておきたい。

〔四〕 一一〇七年～一一〇八年に堀河・鳥羽の両天皇に仕えた追憶を記事とする『讃岐典侍日記』に、受身に客体敬語の下接した例が見られる。

(白河院カラ、鳥羽帝ヘノ出仕ノ仰セラ受ケ) かうさたするを聞きて、(私ノ)せうとなる人、「あはれ、男の身にてかくいはれまゐらせばや。うらやましくも…」(下、四三三―)

続いて、中世の日記・紀行文に、次のような例が散見する。

飛鳥井雅有の日記『春の深山路』一二八〇年の記事。

(二月)十八日、雨降りて(後宇多天皇)御徒然なりとて、南殿にて御鞆あり。数鞆蹴るべしとて責められ参らすれば、年寄りて、腰の労り煩はしくて、(三一九?)目勝りの負けわざの花、あまり責められ参らせて、八重桜一枝、内裏へ持ちて参りぬ。やがて御所へ召し入れる。 (三三三―)

この翁が腰に取り付きて、(鞆ヲ)蹴させず。かやうに攻められ参らせぬれば、いかに思へど、叶はずして、右負けになりぬ。(三三七―)

正徹の紀行『なぐさみ草』一四一八年の記事。

その次の日より、この人(=優婆塞)に誘はれ奉りて、国の最中なるやうの所にいたれり。(四三九―)

〔五〕『平家物語』（覚一本）に見られる、受身に客体敬語の下接したものの中から数例を引くが、あわせて、同一の記事が『天草版平家物語』に載る場合にはその部分を摘記し（略称『天』）、『天』のそれが巻二の第二以降である場合には『百二十句本平家物語』（斯道文庫本）のその部分をも併記する（略称『百』）。

（清盛↓仏御前）「…とくく罷り出よ」とぞの給ひける。仏御前は、すげなう言はれたてまつつて、既に出でんとしけるを、（祇王、上二八二）

『天』 すげなう言われて（二〇一八）

（仏御前↓清盛）「…もとよりわらはは推参のものにて、（アナタニ）出されまゐらせさぶらひしを、…」（祇王、上二〇二）

『天』 追いいだされまらしようずるを（二〇三二〇）

（母とぢ↓祇王）「いかに祇王御前、ともかうも（入道相国ニ）御返事を申せかし。左様にしかられまゐらせんよりは」（祇王、上二二四）

『天』 叱られまらしようよりわ（二〇九七）

（祇王、心中）「…わが身にあやまつ事はなけれ共、（入道相国ニ）捨てられたてまつるだにあるに、座敷をさへさげらるゝことの心憂さよ。…」と思ふに、（祇王、上三三二）

『天』 出さるるだにあるに、座敷をさえ下げらるることの（二二一二三）

（頼朝↓文覚）「…われは故池の尼御前に、かひなき命をたすけられたてまつて候へば、その後世をとぶらはんために、…」（福原院宣、上二九八二〇）

『百』 命ヲ助ラレテ候へハ（三四三三）

『天』 命を助けられてをぢやれば（二九九二三）

（四国ノ兵物共ガ能登の守教経ラニ）手いたう攻められたてまつて、かなはじと思ひけん、（六ヶ度軍、下一四〇六）

『百』 能登殿ニ攻ラレテ（五〇五二）

『天』 能登殿に攻められて（五一七九）

（判官義経↓後白河院）「平家は神明にもはなたれ奉り、君にも捨てられまゐらせて、帝都を出で、…」（逆櫓、下二五九四）

『百』 神明ニモ放レ奉リ君ニモ捨ラレ進セテ

『天』平家わ宿報がつきて、君にも捨てられまらして〔六六一〕

右に挙げた例によると、『平家物語』においては客体敬語が下接していて『天草版』ではそれが下接していないものがあるが、しかしそれらについて、併記した『百二十句本』を見ると、そこでも客体敬語がないことに気づく。つまり、『天草版』に見られる客体敬語の下接しない例が、『天草版』成立当時の敬語使用法を反映したものとは言い切れないのである。

〔六〕 幸若舞の語り台本を読み物に転用した『舞の本』の言葉遣いについては、今回使用のテキストの「解説」にも引くように、ロドリゲス『日本大文典』（土井忠生氏訳）に、『舞』（Mas）の文体は、日本で通用してゐる甚だ丁寧で上品な談話のと同じである。話し言葉と書き言葉とを混合したものであって、誰にでも理解される。」と記される（三省堂刊・六六四頁）。その『舞の本』にも、受身に客体敬語の下接した例が見られる。

〔三浦ノ大介義明〕「∴。疾うく（君、頼朝三）領状申さん」とて、「三浦三百九十三騎」と長帳に判を据へ、君に頼まれ奉る。（馬摘 一四五）

（平家ノ残党）景清が狙ふ所は、どこぞぞ。∴。∴。心
を尽し肝を消し、君（＝頼朝）を狙ひ申せ共、（頼朝ハ）
果報いみじくましまして、（頼朝方ノ）秩父殿（＝重忠）
に悟られ申、前後に叶ふ事もなし。（景清、二四六）

（曾我兄弟ノ、兄、祐（助）成↓弟、時宗）「我君（＝頼朝）
の此度、富士野への御出は、日本国の侍の名字、名乗
を知ろし召さんためなり。（我ラモ）人数に罷り出、∴
伊藤が子孫に去物ありと知られ申、∴」（小袖曾我、
五〇六）

（常葉御前↓下女ドモ）「なふ、いかに女房たち。∴、自
らが古郷を語て聞かせ申さん。∴宇陀の郡の山里の者
也。自ら十四の春の比、父母に叱られ参らせ、都に上
り、∴」（常葉、二七九）

一方に、例えば次のように、予想される客体敬語の下接
していないものが見られる。

（梶原景時）心の内に思ふやう、「∴、此君（＝義経）、在

鎌倉ましまさば、…の旨までも、みな此君の御計らひとなるべし。さあらん時に、梶原が逆櫓の遺恨残て、我く父子引き出されて、由比の浜にて斬られん事は、疑ひ更にあるまじ。その儀にて有ならば、先追返し奉り、…、この君失ひ参らせて、…」〔腰越、三四四12〕
宮（＝後醍醐帝ノ第一皇子）、つくぐくと御覽ぜらるゝに、御息所の御迎ひに、（帝ノ従者ノ）武文、京へ上せられし時、有井の庄司が調進申せし御衣なり。〔新曲、五八三10〕

『平家物語』の挙例第五例と同じことを語る頼朝の発話には、
（文覚〈学〉ノ前デ、頼朝↓父、義朝ノ曝首）「…、六条河原にて既に死罪に及びしを、池の尼公に助けられ、…」〔文學、二〇二14〕
と、客体敬語が下接していない。

〔七〕『狂言集』（大藏虎明本）における、受身に客体敬語が下接した確例と思われるのは、次の一例だけである。

（朝比奈↓閻魔王）「…、荏柄あがらの平太胤長と言つし者、確氷時にて（三代將軍源実朝当時ノ幕府側ノ）君に奪われ申、

一度ならず二度ならず、兩三度まで鎌倉へ引渡さるゝ、…」〔あさいな、上四六六13〕

右のほかにも、受身に客体敬語が下接したものと見なしうる可能性のあるものが三例ある。

（孫一↓孫二・孫三）「…、そなた達ハ此の程（祖父ヲ）お見まやつたか、身共ハ此中見まふた事もおりない」（孫二・孫三↓孫一）「いや身共らも久しう見廻みまひまゐらせぬ程に、定て恨みられませう」〔あさいほう、上二二三13〕

（親鬼↓鎮西八郎為朝）「…、某が娘を一人もつたが、それに食ハれうか、身共に食ハれふか」（為朝）「とても助けさせられまひならハ、御姫様に食ハれませう」〔くび引、上四九二14〕

（主↓太郎冠者）「…、あかゞりと云題にて、哥を一首詠うだ事ならハ、此川を負い越してやらふぞ」（太郎冠者）「是ハ迷惑で御さる、哥ハ詠ミませうが、負ハれまらする事ハなりましたまひ」〔あかゞり、上五五六8〕

これらの「…まらず」は、右の最終例末尾の「なりましたまひ」の「…まらず」と同類で、対者尊敬である疑いが拭いきれない。「…まらず」に、

(主↓太郎冠者)「いや、汝を負うでハなひ、哥を詠ま
せて負うからハ、天神を負いまらする心じや、ま一首
詠め」(あかり、上五五六14)

のような、客体敬語用法があることを確認しながらも。

このように、『狂言集』には受身に客体敬語の下接した
確例が少ないということの一方において、受身に客体敬語
の下接することが予想されながらも下接していない例が、

(絵描キノ金岡↓妻)「まづ以前、禁中さまへ召され、屏
風の絵を御付られ、描く所へ花を飾つたやうなる上郎
衆の、…、十二人御出なされ、…」(かなわか、下
一五〇13)

のような、行為が主体敬語で表されているものを除いて、
一五例を超えて見出されることには注意せざるをえない。
例えば次のようなものである。

(雉領ノ者↓大名)「昨日ノ鳥ハ、古歌の心を知らひでほ
ろ、をかけ(羽バタイテ音ヲ立テテ)(アナタ様ニ)射ら
れたるが、今日ハ鳥も心ありてほろ、をかけぬかと存
ずるよ」(きんや、上二八六5)
(藤三↓女)「まつお待ちやれ、西国に隠れなき、

しわくの藤三と申者(私)が、かた、(アナタ様)
に参合て、歌物語に詰められ(追イ詰メラレ)て、口
をもあかぬと人に笑ハれん口惜しさに、口をあいて候
ぞ、是よりハ、そなたの御弟子になり申さう、…」(う
るさし、下七二12)

(居杭)「…爰に、一だんと有徳なる御かたの御座ある
が、…、いつも参るたび毎に、(私ノ)頭を張らせらる、
が、…、参らねハならず、参れハ張らる、外間も迷
惑に御座ある、…」(いぐい、下四三六9)

〔八〕『井関隆子日記』は、徳川十二代将軍家慶の治世に、
江戸城の、夫↓納戸番・納戸組頭、(義)子↓小納戸番・
二の丸留守居、孫↓小納戸番として仕えた、旗本の家の主
婦の、一八四〇年から五年間の日記である。この日記の筆
者は、日記中の随所に、『古事記』『日本書紀』『万葉』『古
今』『源氏』『平家』『吾妻鏡』その他の作品、真淵・宣長・
千蔭などの学説を引いていることから窺われる、古典につ
いての知識を備えた人。その人が、「人に読まれる事を想
定して筆を執つたものと思われ」(テキスト「解説」)る、擬

古文体の日記である。

この日記には、受身に客体敬語を下接した例が皆無である。

(前中納言齊朝卿方)ある夜いみじう怒らせ給ひて其女房いたくうちこらされあるはなげうたれ、物にかしら打そこねなどしつゝ、いとくからき目見たりしかば、

其後おそれて近付奉るものもなく、(上四〇—4)

此皇子(顯宗天皇ノ父、市辺王)其はじめ、大泊瀬、天皇(雄略)に、此野(淡路・蚊屋野)にてあざむかれ殺され給ひ、(中五五12)

此ごろ移さる、司々おほし。さる中には御気色ありて司とかれたる、あるは御たうばり中らおとりたる職に落されなど、猶さまくも也。(中三六九2)

(將軍ノ)御前ゆるされたるほどの人は皆帷子きありくをふとうち見るにすゞろ寒し。(下二二〇2)

水戸の中納言殿(齊昭)、召れてこ、におはせしは何ごとにかと人いひあへりしが、…。(將軍方)ふしんの事に思ほし召により…：かく俄に御答有ておしこめられ給ふは、いまだ御三家におきて例なきこと也。

(下二七六9)

このように、古文の典型に倣えば用いるであろう客体敬語を下接した例が皆無であるということは、すなわち、受身には客体敬語が下接しないという、当時の敬語の使用法をおのずと反映したものと理解されるのである。

(九) 以上に記したのは、取りあげたテキストによる範囲でのノートに過ぎないものであって、これによって、受身に客体敬語が下接することのなくなったのがいつ頃であったかが明らかになったわけではない。ただ、それが、およそ中世末期から近世の前期あたりではないかという、おぼろげな印象を抱くことができたようには思う。

付記 近松門左衛門の世話物浄瑠璃二十四編中に唯一、次の例があることを、吉田永弘氏からお教えいただいた。

梵釈二天に手を引かれ奉り(五十年忌歌念仏、①五一7)

【使用テキスト】

源氏物語…中央公論社刊『源氏物語大成』校異篇本文(表記改め)

天皇さま：講談社刊、昭和四十年初版。同五十年再版本による。

讃岐典侍日記：小学館刊、新編日本古典文学全集所収本

春の深山路・なぐさみ草：新編日本古典文学全集『中世日記紀行集』

平家物語：岩波書店刊、新日本古典文学大系所収本

天草版平家物語：明治書院刊『天草版平家物語対照本文及び総索引』

本文篇

百二十句本平家物語：汲古書院刊・斯道文庫編『百二十句本平家物語』
舞の本：新日本古典文学大系所収本

狂言集：清文堂刊『大藏虎明能狂言集』（適宜に仮名に漢字を当て、

せりふを「」で囲む。）

井関隆子日記：勉誠社刊

五十年忌歌念仏：新編日本古典文学全集所収本